朝夷巡島紀第八編

村田

四

特
八遠13
1278
39

1878
39

村田

朝夷巡島記全傳第八編巻之四

東都　松亭金水編次

續輯第十七

主と索ね化ぶ隱川の上
奸計一とび就る石戸の郷士

かくてその明の晨。東雲の白むと候て。馬飼標吉郎嗣忠い。例の駑馬ども秣飼ひ。宮弘義と弘秋と。俱ホ。もち出て。冠者ゲ往方と索ねんと促ーけるホ。宮小四郎弘義い。老の身ホ狩倉ホ。疲ホ。ちうとも起ホ。ばば。昨夜は医療ホ。此ホ。心ヒ慰む為のと。既ホ両風も止と夜の明ぐんホ冠者ゲ。何ぐてが。の林原ホあゾぐさ。程なく皈りあゾ。心せり。小奴ども。疲ホ。眠ホ。あるると心ホ。起ホ。便ホ。不為ホ。ぐぐ。雲時猶後せよ。とぞ。ぐの子い董次秋弘ぬ。父ゲ如此と。ぐ。然ホ。急ぐ。

枕を擡げて。回答りもせず。嗣忠いとゞ父子日来あやぶいと老実うつゝ。
思ひとり者の時〳〵。かゝる薄情さとはあらじ。渠等は虎太他人なれども。
とは自辛酸。吾は渠等を斉しく。乞丐と頓知を。
不幾ふもとに告て。宮の門あより乗せ。元来路の案内は知らず。昨日僅
ふきさるを心當ふ往れどもふるはもの幅三丈ばかりの溝川いとゞ隠川なれば。
らんと岸をふりけば。昨夜の大雨ふ水高や溢れん。岸よりとゞく漲り流れて。
桴もあらぐばかりとび。渡るべきさまもなく。浅瀬もなくて馬うち入れ過あらぐ胡虜の狩人。
右やすん左やと川端を往ゆ戻りつ躊躇てゆく半晌ふもありぬべし。かゝる処ふ童次郎
馬と早めて地来り。標吉とうて冷笑ひ。和主い五人と実の者と。思ひとりて
て少し扶て。一騎渡りて。小奴ばかりせふうちも措まず。来て〳〵とび川
さへ。いまだ渡さるあらぬ笑でゆかくて家のこと遂りく。やうしもの詮ある。鉞を

人やと潮とび。標吉はて胸の狸。安うび怒りい含めど。今争ふべき時節に
あらぬ渠い按内もよく知つるふ。まづ従ひて教へと嘗げ。れあんと往方とあ
んこと。肝要のまとこ尽くゝ。微笑て彼ふ對ひ。努和殿なと実のこと
あらぐまとて。己が為ふい主君あり。然るとてまづ往方とあらず。須臾も安うれば
東雲あらむと候つて。出んとするふ疲まうと。宜ふも最うり。然て心ふ捷さ
まび。按内いあらねど頓注て。素れ〳〵のこと。さるべきひの外ふとの川の漲る水の烈しさ
に心臆して渡りもやらぬ。辛く果てゆ。愿くいとの浅瀬と教へてと慇懃ふ。
秋弘誇りうふ。ふんゝと如くこの川い。細迫ふのまとで大雨の後ふ。千方の水聚まるゝ。
深さと日来ふ倍し。比や舟あり桴ありとも。輙くこと渡さんやこの水の日来ふ
落ると。候うり他のこらあらぐ者共此処ふ准備せる。延と敷て頓謝ふ。
休息ふと。従者ふ命じて薦と敷せやと。馬より下りて候こと

景勢ふ馬飼摽吉郎ハ呆ま果ろふも水の漲まに烈ろくハ人ゆるりの
ろ。その幅僅ふ三丈ばろ。駑馬とうち入ま荒ろ渡らんとろ雖
くゆおま。従者ゆるふ命ド行木の桴ゆるど筏組さてゆべ。時のゆるふ渡い
つべ。然る所優ゝ殘ゝと。自然ふ水の落ると候ハ人の心も知られふ似
ろ。五ろ人来ー指めろ。いろふ流まの烈ーとも。馬うち入んとろ深淵
もろゝゝぬ旱川ふ。押流さまてろとかろの沫ゝ消ゆん身ハ惜まゝとも。若ま空さ
ゆろゆゝべ。誰あつてそのことと。君ふ告る人いるゝ。君ふも媛ふもうゝ往方ろふ成
ゝと生涯の頼ひと撫まゆゝさん。今ハまや渠ゆる来まろ。さと人押流さろとも後
人あまとべ後易ゝと思ひ定めて童次ふ對ひ。まろゆや朝りゆんべけまど。安閑と
まて。伺ひまゆるもろふ在ふ忍びわべ。任意過ありまとも。開ハ天命ふ仔ロ在下人
この川と。渉さんとろゝ。和主ゆる難易と見違ける。万一底の水屑ゆるゝゝべ。紛

者ふそのゆて告て後れと因て秋弘ろち笑ひ性急ゆるも綽ふぞろゝん。
我ろの地ふ生ま。案内と精ろく知りゆゝ。渡ゝられ川ゆるとゝと要高
ろまて候ゆるふ和殿血気ふ早まてりとろの中流ふ身と果さべ益とまゆる
所更ふるゝ。他の笑ひとゆるのゝ。烏滸ゆる所為ゆるひとと冷ゝ天人人
ゝんむさゆやゝゝん。當下摽吉顧てむゝ日本武東ハ心のゝき。上総の海ふ隙を
のひそゝまと跨ても渉ゆろべと宣ひーと物ふゝゆ現ふ猛く勇ゝとされ心ふハ恐ゆ
ありゝん況やとまハて流と渉るふ雑さとゝハゝん然れとも敬ろゝて悔る
まゝき教へあり。故ふ和主ゆるふ憑ゝゝゆのゝ。元来難易ハ天ふ任ゝて。伺ハ人ゝ
ゝあゝゝんゝらひまあゝどかの駑馬馬ふ渚拒合せて隠川の渦巻ふふうちへろ
ろふ聚會ー雑人們。その勇まゝさん賞ゆゝ。心ふ阽と観る所ふ摽吉後人水
練ゝ得ー者ゆるまべ水中へ入ると斉く鞭ろり跌り。尾筒と左手ふ緊と撓と

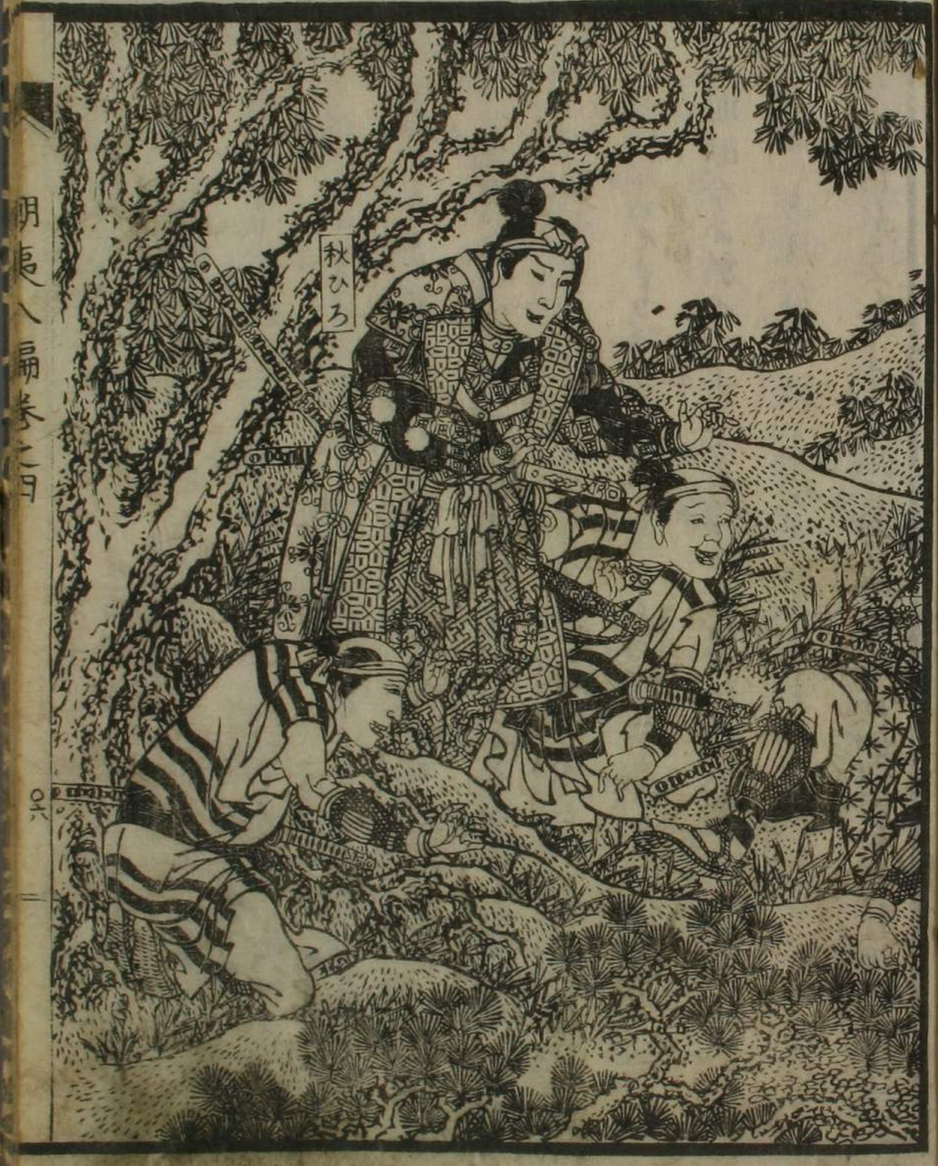
声張あげて勢ひを扶けれバ駑馬といへども鼻嵐と等しくて足掻をして十四
五篇むかひの岸に縋るゝ著く。標吉閃りと諸跨ひて左手の方へ逃らし
ゝバ秋弘を始め雑人们ことゝとゆえて欲べもあり。まゝ徒に僥倖といひ罵りて
喇もあり。左右して標吉ハ風雨の為に扶われ径を塞く樹木を乗超え此処彼
処と眼を配るに兼ねえのある冠者の馬。彼処の樹蔭に繋ぎてあり要こそあれ
と跳著るに。昨日列卒にもちてし雑人们三四人閂し枕に倒ましや。冠者ハ
新ざに見えざれバ心悸き馬より飛下り。右にまバ此方に旧たる祠の裡
こそと眼をさえるに椽ハ朽て薄刈萱茂りしまゝに枯てあり。らつにも昨夜
の老媼がいひたる魔所といふのこるゝんあり。とかの馬の傍に回き。つるに縁
に何やらん結び著るのあり。手ばやく把て披ぎらんるに。怪異に出會
命さへ絶べき処へ一道人が。救ひて将て明ハ全さけれども再び世間に出んるのありや

あやまりぞかし。若此まゝに帰り来なバ我を世にある者とも。後の幸ひ共に斜
らへべし。必ず往方を索ねんとて無益に人を費して且つらず為に悶絶せる列
卒の雑人四個がと息出て悉るへバその労を償ふべし。倘この書るに
息絶らるべ従類に遍よみし葬りの料且まゝ手を父母妻子にあるが。後の将すと
ののまべし。手限の身ハその時の宜しきに任すべし。聊異存あらざるべし義郎と
志て花押を居らる。標吉ハとまでうんまゝなで呆まと呆るてのこ敢て左右の思案も
出ざバこの雑人们どもらにもあるそ。蘇生らしあべき節の容子も畧ハ分りるへこまと
肝要としこちら傍て。渾身を探るに冷るまど胸のあたりに聊ハ温まりあるやう
あまバ全く縡の切るるあるもと唯備るなる薬をとりまそ口に含ませ潦ぎ。
擽ひて注ぎ入るるに且くありて眼を開く。標吉嬉しく声をあげて。こや心を定めよ世よ。
我ハ吉見刄祢の御内にて馬飼嗣忠と召るゝもののぞと云ふ声に。尽く起あがれバ

摽吉は傍に近づき。斧より手を脇のまとり。掻撃り動かるれども。剛く人心地
著きる容子かくて残りの二個の者も。蘇生らんと憑りく。茅と舎まち茅
と決ぐ。こゝに一容に息出ぬ。摽吉大に安堵す。偖你等に問ふことあり。
刀称に屠副こゝまで来ていつるゝ乳絶をゝこる。まこと吉見又称の
ゝ性方。ゝ頃ゝ人ゝ向まそ件の雑人们昨の小狗が隠川を流
まつゝと見捨んに不便ゝそその後と逐のひゝどの路任屈面の茅
川端へ稍に遠くのふより。彩てに先途を見達けぐゝ。宮姓を他の人も
俟てあゝんに頼還らん。宜ふ打ゝ雨風烈ゝ。面と向べき様なけまば。
且く手外に謀ふ。日は暮て善悪もこゝまで。刀称は彼処の祠に俟
を。両用と湊んと作するまに五吾们も。同ゝく住て潜まりとゝに益頻
両と明ゝ玉ん空もゝく。心ゝぐも時列は移りぬ。初夜こぬとゝ箇

様ゝの蠱者をゝの社壇に居並びぬ。刀称は得に孤狸の不ゝ
ゝん怒まゝ。泥ゝ色もあゝぐゝと。五们は渾所戦栗生る心地もいつぬ
折ゝ。昼より明き電に嗟やゝ猿くその所へかの蠱者を火焔と吐き踊り
かゝを食はんとす。そまとゝ見ゝ脛暈倒まゝもあそその後へいつに成ん
更に走ゝ刀称は何方へ越のゝ。まと彼魔絲に命を。拔らまゝ
ゝる紙。とその一什と語ゝる。恐懼に怪だ所と震ゝ。慓きゝまゝ
摽吉郎は篤と実果。偖も怪ゝき物語我陸奥に在ゝ頃殺生とゝ
除り深山幽谷を徘徊り。樵夫も通はぬ難所に入りそかゝゝ辛とゝ
あまと然る妖怪あは出舎ん。況や恐るゝ狼のこ況や此処は山深ゝ変化
の居ゝ所と地にあゝ。見あは究めて仔細ゝあゝん然とゝ。你達は知ゝ
その後と。ゝ思に結ぶ遺書あはかゝゝず住方と

馬飼雜人を
蘇生らして
主の
行方を
問ふ
へう吉郎


秋ひろ

素なるまで具に縷めあへども臣子たる者主親の往方をしらぬとてあるべきかは。
閣下のあるべきや。倘その渉に世を遁まし隠を栖道人のあるやと聞
ざるかと問ども衆知らずと答ふるに於て馬飼も詮方なく将者が途せ。
馬を渠等に牽せつゝ元来し方へ立帰るに昨日山川の落る日遠き水
嵩の減じたりとて董次秋弘彼処を渡りたるに未だ標吉郎に行逢ず。その
顛末を問わたるに標吉郎は心裡に渠をば太く疎めども今は果べきことあらねば。
祠様に雑人们が云たるまゝを告しらしまゞ左に右に宮姓と商議して針らふ
下。馬を早めて立帰る。篦媛は宵よりして俟焦まてる良人の帰の上今日も
亦や晡時今に於て標吉が音信なきは刀祢の他郷に逗あるかと疑ひ居し倘
然らんにはその後は誰を便に世を送らん。産まではいまだ七夜さへ過ざる
嬰児の父の顔さへしらずして成長べきを便なしや如何なる禍の神の崇

ら前世の罪の報いなるべけれども重ねくの憂苦労からん猶この這回の狩なぞ
立なんのを此に深く忌おもひ脱に詞に止めても止らずとぞ武夫の意地しなる
あゝ心なきものとは殺生するものゝ報いくともいへぞえに圓通大士の化名毘沙
門天の罰なるらん。かゝる憂月を見んよりも。彼陸奥の賊寨にて命を捐なぞ
増ならじ。と過去未来種々と思ひ廻せば端なく胸のみ痛むを地に物さへ
給はべらん。この比よりして老実な媛が侍て離まじめ。斧木は夫と共に浮
世話説に縛よらせて。およそ女子に生るれど果敢なきものはあるべからし常
言にもいひ傳ふるとぞ思ひ返せば然にあらず。女子は五障三従の誡めあり。さ
いひながら愛さるゝは女子なり。如何にとならば國治まり四海太平の世にあれば。
男に倍る歓楽あり。元より深き窻に潜む貴き人は羅綺の衣に纏はれ
褥を累ね。珍膳美味に飽満て或ひは好る絲竹や。又俳香茶に日を

送り子は産たりとも手自育てぞ縫針さへも人に任さぬぞ。さて此の栄耀に明し暮せどさすが上品の人のうへなり。中品下品の此のうへにしもさすが夫その始末にありて常に媛もうしろめたく。扨擔げて今日の日を貢ぎて送る人もあるも或ひは遊山神佛へ詣づるとて、その女夫連良人はあらき織布の垢染たる衣着すれど。渾家は却て仁田山紬。紅梅織の幅廣帯。美麗を傍ふる女子の徳さまざま。往昔の諺に。女子を産とも憂ふる事なかれ。男は侯に封ぜられずとも。女は天子の妃となると唐の世にさへ言りしぞ。先頭良人の睦しからぬ時は闘諍争乱の世といへど女子の身は軍の事に与らず。任意怨敵をつくれど。既にその家滅ぶるとも。輙く女子に刃を加へず。還て敵に愛らるるもあり。以前に超る歓楽栄耀に。憂を忘る例もありけり。於是さへ実ある夫と思ふ女もあるべしねども。適得がたき生を稟僅の義理にかかはりて。身を洗にするもあれ。

愚の極ことに吾儕は思へり。假令二世と契りたる良人なりとも世にあるものならぬ後らひにて命終りなば。互に黄壌一堆の土となるのこその迹なり。先達死する人の為に。その跡を尋て死しなりとも。悉皆何の益かある。世に貞女なる節婦と一旦称せられても。称する人も法共に終の煙りと遁るれば。名を遺すとも妻時のみどろなり。雨雲妻妾のみどなるべし。生て歓楽栄耀を尽し。定業を俟に若じと。詞を巧くに種々と諭し。貞なる斧木が心中誘て。良人の弘義が北條刀称ふひは世吉見狩者を亡ひて。その子の董次秋弘に石戸の荘を領せしつ。箆媛をば秋弘が渾家に做さんと惑めるより。暗に心を動すなり。箆媛は深き巧をば。神ならぬ身の知らざれども。ややに狩者が此のうへに過ありしを知れども。この身に告なば哀ぞ。不慮の事りやあらんかとまづ推隠し。夫にも諭すのみと案じて。いよく胸を裹つつぞ。その安否刹那も遂く

ゆくのこ。胸ふ逼りて四苔之果敢とそくに落もせず。俯さそくくと落る
涙と指りて拭ふ。この内馬飼摽吉い端こそ帰り。件のとと紛市ゐ者て
冴者ゞ遺書と。披けば媛いこで一目ゐるゝ手之処ふ平伏て声さえ揚ぶく
と泣く。宮小四郎弘義夫婦もいこ孩さる景勢ゐ。中ふ斧木い空涙涌が
如くふ出ると拭ひ。ゐた狩と勧めて。思ひもかけぬ凶変い災難ゐ。とべ
ゑふ女子心い誰とも。今ゞきゐめて媛ハ茸が。狩ふ出ざい箇斗ゆゐ。
と吾们と。怨こゐんとまゐまこ。道理深く言釈ゐ。然ハれハ才ふ恙く
道人ゐ〜ふ救いまこ。とゐふ恥心い易ゐ。必跡と尋ぬゐと。宜ふ仔細い
ゐ〜ん。吾倆つゐく解〜がこ。ゐん分いゐふゐひゐこ。ゐふ弘義今すでい然然
こてゐるゞ眼とゐひ〜ゐまこと再びかの遺書と熟視て。妖怪ふ出今危ふさと。
一道人ゞ救ひと浮て。死の全きい限ゐた運とゐ祈べき然ゐと楽ふ伴れ。

此後世間ふ出ゐゐ否。知ゐぬとゐこそ不審ゐ。什麽道人ゐい何者ゐ。冴
者ゞ危急と扶くゐれゞ。好意ゐ。時刻と移さず。送りて来べき筈ゐ。
何方へゐ伴ひて。帰郷の期さえ知ゐ。前後甚相違せり。然れゞゐ。
遺書ハ正ゐく冴者ゞ自筆ゐ。花押さふ居ゐ。とゐ深き仔細ゐ。
都てゐ。ゐ遺書ふ任せ。方も索れず。ゐ。鎌倉殿へ言上ゐ。
公裁ふ任せ。此ゐ産まゐ。鶏子ゐ。男児ゐ。一旦冴者ふ渡
ま。石戸の荘いゐ若子の領地ゐ。疑ふ。さ女性と釋尼ゐ。
後見ゐ。怪ふ夫婦ゐ。孫倉殿ゐ。内慮と窺ひて。
ゐと在下ハ思ふゐ。ひて媛と入ゐ。ゐ不定ハ
稚土の慣ひ。青春ゐ。死すゐ。
ゐ。ゐふ冴者ゞ前ふ於て。ゐ明
ゐ。ゐ所ふ在ゐ。空ゐ月の環ゐ。時節ゐ。年経ゐ。

をのゝくまでも。彩言さび貴人の非と論ふ仏までも。妖魔鬼神ふ出給て。
終ゝに失まじよ。道人ふまゝ異人ふまゝ。危急と救ひ給ふ。
ゝ帰りあらんも。所謂いあるゝ。然ゝ僅三ゐ除りの。自筆と遠ち
跡のよく計ら人とゝそゝのこ。雑人ゐ存亡い。仁愛ゐ忘れ愛ゐ仏地と
妻子のゐ及ぶ。媛い女性のゐ馬飼刀称い仏ゝ思ふ。在下三ゐ
ばふ。這ハ多くゐ夫婦の間ふ設るゝ奈仏ゝふ媛ふ黄の義絶
朝臣の嬢ゝの。信夫の荘司ゐ赤心ゐ。取合ゝるのゝゐ。兼れゐ陸
奥丞兼難難辛苦いゐ更ゐ操正きゐ方ゐゝ。行者ゐ心ふ仏ゐ厳
ひゐる所ゐ。然ゝでも今いゐゝ。條ゐゝ明ゝ地ふ縁ゝ断い義ふ背く。
さいゝゐ生涯配遂ゐいハ思ひゐいね釋ゐゝ。這回の危難ゝ僥倖ふ領地と
捐恩愛の切ゐふゝゝゐ孩児ゝ顧もせゐ仏方へゝ退ゐひゐゐん。這ハ

媛ゐ寿ゐ心ふ合ゝゐや否ハ知ゝれど。能才ゐゝ年月と多く経ふ老ゐ
眼ゐ。鑒定一分ゐ違ふゝ。槌ゐ大地いゝち外ゝゐゐゐ外ゝゐと
いゝ誇ゝゐふ言ゝ。當下斧木ゐ侍ゝ。膝ゝ進めて小四郎刀称。
ゐひゝゐゐゐ男女ゐ縁ふゐ。果敢ゐゐゐ。喩ゐ翠帳紅閨ふ枕ゐ
ゐ私語比翼連理ゐ契りゝ交ゝ。君忘ゐゐゐよ忘ゝ。と拉言ひ中ふゐ忽地ふ
ハ浮世のゐゝひゐ。珍ゝゝゝ古へゐ人ゐ編り物語世ゐ歌集ゐ恋ゐ歌契り
中ゐかゐゐふゐゝ。ゝ恨ゝ世ゝ喞ゝ神ふ佛ふ願ゐ。空ゐく歌ゐ杜ゐ。
ゐゝ笑ゝハ媛ゐ縁ゐゝ。知ゝ召ゝ所ゐ。何ゝ今ゐゝ諭ゐ。ゐゐ恋ゐ
ゐゐゐ心変りゐ世ゝ人ゝ。ゐゐゐ仏ゐ。此ゝ人ハ稚児ゝ。大ゐふゐ後
り ゐ。末ゐ安堵ゝ量ゐゝ。他ゐ思案ハ行ゐ。哺馬飼ゐ。標吉刀称ゐ
俱ふ媛君ゝ。諫め励ゐ後ゐゝ計ら。ひゐゐ専一ゐゝん女ゐゐ。

をのれまことど鎌倉刀称ふるのう明地ふ汚えるべいつるは沙汰ふんも知れず。
折角傷いるこの野地は咎ありて没収せまべ。媛は再始めこの若子も忽鈍
流浪のはるすくるり。後の艱苦いつるくんまづ府者刀称と重き疾病と披
露さそこの若子ふ相續のこ頒ひるべは許あくんい必定あんこの荘園ふ瑕
つくこるり。夫婦のこと良人るり。小四郎弘義縁てう。執権のは節ふ侯ど。こと
る貧と蒙り伝まべ内外の人ふく憑こそ。計ふ伝の仔細くあくんと其
言所理るまべ。笹媛も摽吉も。途方ふ暗るとりて。ぐりたるふ憑
むとのこ。他ふ議論もるりろり

續輯第十八

黄金溺る優婆塞ぶ浅智
急ふ迫は佳人の嬾ひ

宮小四郎弘義い後て深くも憑ごこる。修験ダ法術ありんぐまるあ。ぐんと

いんど義邦い往方も知れん身と退てまづ頒望半い快ひ丸猶とあくふ孤の首
尾全く整んと次の日早天ふもち出て千寿と草加の間るり。竹塚とりん所ふ赴
き。修道院と訪るふ。折節酷残も菴ふ居りぐまとるり恭ふ上坐ふ
清ぐりて。まづ寒暖の礼畢り。先頃憑くるひつる吉見調伏のこふ旅ふ貧
日夜丹精と凝し。熊羆の魔神と遣しそ。その魂と抜んとせしふまこ効ぐ
神ありて果さるり報命こり。始めより言ぐくく。元ると良家貴族
の裔ふそいまづ皇統の傍流ぐれば輙くこると図りぐて。然まどもるる
法術弛む所るまべ。後ふい君ぶ望こを果さん心強く思ふるくとと受て弘
義ぶ大と合こりそのるり。虎ふ和僧ぶ法力りて。風雨と起し。渠ごこて。
脱ふ死地ふ就るあくまでいまづ命救の尽ざる所う。その場い紛ふく逃げ上
ぐるのるぐ。固様とる遺書のて往方ぐ上ぐ海ふの渾家及孩児のこれと

謀ることいと易し。然るに吉見が從臣に。江三郎と云ふ奴。偽りがましく校去る。
當時妻子の留ひ〳〵に越の國に赴とて。帰りの少し程あるべ。その間に媛を
董次が渾家とす。帰り来ることの。のろく淺易うしんと思へば媛
い欲さに迫りて。いまだ夫婦のことに及ばず。いつか和僧が法力にて是とも拒ま
整ふるこのあるべ教へてよ。こうひて懐かし探り。紙に果さし渇りのいつくでも知
黄白の重ねに多寡を推量り。酷残い額を拭て。重ねぐのこの後の辞に
べき所あるとて。却て君が心の厚さを知ぬ。受納いて丹心を抽づる
已が職分。辱しと推頂き。手匣の裡に収めつ。さて賢息と媛がこと。易く
仍て。男女の情態推て。自由ぐこと所あり。況やこの頃欲ふ
沉〳〵て肺肝を。閉塞めしとば百千万言口説とも。その上耳に入ず。
挑まば迫あるんで奇特なりて。その子に若し。なほ且く俟べ。法にかゝる。その

間に調理し果て酒殽。酷残が渾家持出て。強〳〵と勧めねど。遠路に
労まるひろん。あら渉りの不自由さ。魚は川鰕。朝に鮑。生蛸と。この頃千寿川
濁りて鯉もとれぬ。この自由あるあ生芋の饅茹皮剥。鯰の吸物。味はと
いへあり。殊に吾倅が庖丁は山陰の〳〵山みの豆腐の細〳〵切。得もいはで
こと料理。詰柄苦〳〵ぢは郎酒。献酌の。と並べ。さて小四郎いとひ
心配つに。腹の加減。志を受ぬ。盃を頂く。渾家は稍〳〵退徒の間
に花とかざせて。酌つ酬つすれど。に。道院酷残は一間に入りて。
平形金珠と押揉。振鈴の音いと凄く。尼時分の念じ。畢り。頓て衣服と
更めて。この所へ出来り。刀称快く。頂けの〳〵さてこの秘蔵は男女愛敬。
守護の賢息の肌に着け。今は有い婦人の国の。天井に貼の。然る時分自然
合の撿顕りべ。と白木の折敷に載て出る。小四郎把て。戴き這い辱。その

とるゞぞに愁ひなくハ此他に何妨のあるべき。今日ハ寛と歓待に酒量を過
酩酊し。大に尾籠を現じなバ。兎もかくも免されよ老の心ハ物毎に急なるぞかし。これ
僻なるべく暇乞さんとて従者を促し帰りゆく。輿に馬飼標吉ハ刀を預り居
冠者が住方を索ねんとおもひしかど。かの遺書の旨をとりて小四郎頻りに障ふる
から猶そのまゝにて得果さで。その日ハ然止にけれど。剏てあるべきにあらねバ
様々に附会と痛も篁媛にうち對ひ。再び住方を索ねんと小四郎云ふするなれバ。
只在下一人にて探もとむる力足らん。然ハとて商量べきにあらねバ様々と思ひ廻ら
すに朝夷大人ハ往昔よりおん交り深くして同胞にも超たる人バ在下これより
鎌倉にゆきて。彼大人に辞を告商議なさバこの後の計らひにもなどか力を得べし。
との談ひにとらひけれバ媛ハ涙の顔を揚て妾歎とて伏沈し中にお後の
辨へあらず。よくぞ心着にたる頓て往て義秀ぬしにこの旨商議せよ

彼れこゝの主と浅からぬなりきとまさ沈吟のみなりしがやゝありて去来一足も疾こそ好る
べしと促して路用をとり出て与へしバ馬飼ハ心を得て小四郎今日ハ他行と
淡ひ斧木と董次秋弘に。そのよし告て媛が身を憑こときこへ准備して石戸の
荘をぞ出るかくて其日の黄昏に小四郎ハ帰り来つ。渾家の斧木を一間に
呼び声を低めて残が動静逸ぶ物がたり。かの二箇の身を出しおかん事を
程よく計らひね。かの標吉ごふ鎌倉へとて往しハ物怪の僥倖なり。董次に
克と言得さし威して善なんど賺すとなく彼時宜に應ずべしと云へバ斧
木ハ点頭て。修道院が丹精なり極めて途なきにもあらず。その上ごろの頃それとなく
媛が心の動くをみるに吾儕が説てなさバ手にも仕損ずまじ
ども斧木ハ上八[illegible]董次ハ[illegible]純き青春にて俤に
いと晩稲の[illegible]覚束なし[illegible]微笑て国に貽べき[illegible]

筐媛の方ふ持せさ遣ハ一字とさ上人が子育の神符とて供へのひしものかくふ。閨ふ貼おきぬべし。宅ハ吾儕が貼んとて脚搨より寄せ天井へ貼て是より後ハさて孩児の成長のことぞの餘ハ教て枝葉なる頂妾なまりしつる世の浮沈ハとく人心の常なるるとの物語ハ假初なら仇云ならず。かゝらんものゝあるべしとさへ。夏ふぞ不知かよと為ほぞその舌の根も乾かぬに既に冠者刀祢が作心変りあれバ知らぬものなかりしとまぞ浮世の慣ひなるべし。その時の宜しきに就とりみれものぞ。努く忘れな人ぞと聴ふ諭して出てゆく。筐媛ハ産とぞ安かりし。いまだ日柄もあるべくハ縁ぞ世ふ在る身ふて冊ぎつ。乳母女房傅副ふべ。侍子ふあるべき程なるまど斧木の他ふ婢女の一両個ハ要ふもをしぞ。全輪しさふ守ち出て。穉児の事ハ何くまと。手自のかならぬ今日ハ日和も暖なり。湯を浴ぬ人斧戸ふある千葉と煎人ぞでむさるるく斧木なるふハ筐媛いなふも物を扱ふふ穉きてぞ若けまと。浴

室ふいりて腰湯を浴ことまて心地清くなりなりと歓びぞ夕餉など任祢ふ不どふ日ハ暮果て初夜ふも近し。斧木も今宵ハ急ぎぬる。針線ありをちまへ来し標吉郎ハ鎌倉へ出立ぬまどべらの子舎ふぞ孩児と媛とのこと。婢女ぞあれ茶の間ふ居り。居睡り拷てあれも甘え言数ふなるものあらねべ。熟睡なるさる穉児を膝ふ措まく安撫さまふ傍ふあり。ある衾ふ纏て側ふ寐させ孤燈ふ對ひ動もすまべ往来のことを案じて胸逼り。一人涙を催さすうる間の隔紙さうすと開て徐く入来る董次秋弘右手ふハ銚子左手ふハ殽一種二種なり。折敷ふ載てとまて持莞示して筐媛が向ひふ坐して標吉ハ鎌倉へ遣のひつ。生憎母も急ぎのことあり。誰彷よ人もなき宿ふさこそ淋しく在すらめと庵逼ふ独ふ酒殽て些なり持来ぬ。然いまおん身ハ常よりも嗜そのハぬその上ふハまのべ産後の日数も遑ねバ。欲ありどおん人ども菓子と茶ふてハ心も潰ず。殽ハ客ふなる

荒川鯉こハ乳汁の薬とて是ぞに給べて終夜語り明しけるが。とかく懇に近づくる
鯉の濃漿酒鯰の煎鍋とききて産後に障なきものとて携へ行べしと呟くに侍
篋媛うちもおもはず微笑て。この程よりの頻ひと劣しからんや菌汁に心遣して調
なりしと姫しまゝで不興し宜み如く平生より志て常まぬ酒と此頃の身
まではいかになりなん。されど二種の酒殺いづれもよしと云るになるぞ夕餉の間も
あらねバ後にこそ賞翫せめ。折角斎しらひる銚子ハちんすぢ喫せん。不
束ながら酌とし進らせなんと銚子とりて。秋弘ハ心裡十二分の笑を含む。
さいこそ媛に酌とさらせ。三ツ四ツ五ツうち重ね舌打して平生に飲む酒なりける
ぐら比ひなき美人の酌に味ひハ弥陀の心に在りける甘露もかくやと思ふ
まで甘き嬉しこ今宵こそ実に上もなき喜見城かる處女とふり捨て遠く尋
こし吉見刀祢心裡と解しがたし媛よかならず欲きなんぞ嬌東と世なハ又麗花

高萱茂りあふ武蔵野続きに生して。葎が宿に成長せし根なし金蘭草
荇雲雀の床にあるかなきかに。既に荒まさる醜雄ても心の底ハ春霞靉靆て
咲かずる花の都の洛人に。劣らぬやと思ふ心の。然生とてもとまぬ。往末の程ハ
この身に引当てこの孩児と成長。冠者が遺領石戸の荘。安堵しなんと思ふに
五分でもひかぬ吾儕が存念心強くも思まずよと底の心ハきへてまいらずちかくもでの
思ひなどハと憑も志れ董次が洞媛ハ微笑不測なる縁にひかされてこの孩子
和殿が母の外抱に共なまへも嬉しきにまさに不憶とありて。この孩児の生先までも心に
掛て懇に思ひなる赤心ハ。何の世にかハ忘まるん万一のハよろしき汝らびそとのへ就
董次ハうち咲り。媛よのう吾們とで憑しと思ひて。往末までも任せん宣ふ
什麼実言なり。倘然らんにハ在下が思ひのさけとも言ひべし。おんさがことく承伏てる。
當下なりして嬋娟なる處女も世にハあるなるかる女子に倶しあらハ。村者もで

誠に似たりの男と度まつその甲斐なかるべし。遊女と諸倶に明し暮さば世間に絶て望みなかるべしと思へども他妻のいつまでもまこと詮方なく人とも知れぬ心迷ひ乾すあへぬ袖の露思ひに憔悴哀れなるに病細る身の切なること堪へ難らんまでも繁ざるべきぬ緒の早くさえよとのみ世なる程の恨めしく欲きこりをなほ不計もかく成ゆくいとまを思ふ思ひの怠人べきやいかや未なるこころ変ぬ人の歌きと身の悦びなるまい鳥浮ある所為らも答めるべきねばこの心変りて捨ぬる人と暮ふ曽しさそまと拾へる赤心なる疑べいつまで誠ある。恋しの人と綢繆て。睨ぬ初る童次ぐ新崎媛いとまてのとぞさえ耳の汚いく腹をそこれ思へども。まより後へ何ぬ著問ひ商況ゆまるる身ありをを一言ぬ辱をあらば還つて後の妨とあるりやせんとやへるる怒をと笑ひぬ紛らて酒を過てる種と戯まること宜ふよいなる狩者ぬ捨らまてやうべ身の沖の船風の隨えて

流れ寄る浮ある才ぬいありるべいまを定ふ身の暇縁しと断しといふ不もあるべ。開と逸早く異人ぬ身と任しるその後ぬ元の夫の帰り来べ何と言釈術あるんとまと思へば懇ぬいそる和殿が赤心ぬ推しるべも速に。應といまるべ夫婦の義理。この後いとく良人より。身の暇ぬ給とべ然までぬ宜ふ和殿が心と爭慰めざる今ぬ。まづ夫まぬの互の胸ぬ収めて正をくるすあの若ぬ。岐釈の人と羽さえうち和らげて岐うまべ董次の嫁ぬ頼うち瞻ぬと。然一旦べ今さまるぬ返ぬ羽もあるべれど再びこの世ぬ出めとあるその逆言まるままるの縁。とまと限りといまをの知まるる。まるる左右ぬ見ぬ張人三年三月候ことを另ぬ離縁の証文来るまでまと知るいも。かく宜ふの情ぬ。楊貴妃楼の嬌姿る。と深山松のもくつけき似合ぬ恋と一筋ぬ。めめが怒めるく屑るるねと雄子の渇くまと初ひ出て美」まだぬ生涯世間の胡虜死ぬまで雪もる術あるや

世間ハ左もあれ右もあれ思ひ結ぶ情緒の惚ひかくハ百年の命とさへも縮めんと思ひ迷ひつるうち一心ハよく従ひあれバ人を殺して在下其士の鬼となるまで覚悟あれバ身ハ傍に在る佩刀撥把り面相変へ罹口どうち甘げなるその暑勢媛ハ得に該る色さへあらでとりて障へ聊にめさるる秋弘ぬ。女子と侮り威しの刄をもに恐るる者あらねど不審のる所とそれまでに思ふ和殿が心を汲バ。かねて憎しとおもへども良人の眼ハ得ずもあれ心に従ふべけれども。いまだ産後の肥立もやらで戯淫するこそあるべからね。暫く日柄を俟あれと賺し宥むる筐媛それと悟つて秋弘が道を日数にいか耳をかさず。産後七夜の間にて再び妊娠婦女子もあり。実情あらバ然べかりのすと辞に論ハんや。今宵ハ千代の始めとて自ら斎も酒散三三九献も疾くようち解あへと媛がゑを緊と把まえ筐媛振放さんとおもへども暴に心騰膨

と夢か現かうつゝとも辨へ知られぬ可になり吾か聴も下毋の閨の瑣もあやなれ不に傍に臥させし翠麻呂名なり孩児の魔にやさりや声揚ていとも頻りに泣さるゝぞ媛ハ夢の覚さるでく該さ周章抱きあげ乳を含ませつ種々に蚋れまども猶啼止ズ。とまハ世に久驚風の虫の所為か便なしとうち居つゑそうち喋ぐ胸さへ共に裏さへまさ詮方とゑーざりけり茶の間に就し婢女の不図その声の耳に入り目と覚して若子の啼声常にハあらじと後さつ来まバ董次もその聲に今ゑも来るじさ及に歓待も折から斧木もとるに来て貯へ持る熊膽など程よく解て含ますれバその薬効や速けん次第に胸の閉さる容子に人々安堵ハなせど暴のこともあるらんれと今宵ハ殊に婢女も臥も積ずにありけれバ董次も今さら往方なく実山に入らずら空しく皈る心地ハすれど姑ぞのさ及に似もつかぬ風に柳の忽地に靡かんと

酒殼を
齋まで秋弘篭
媛と挑む
秋ひろ

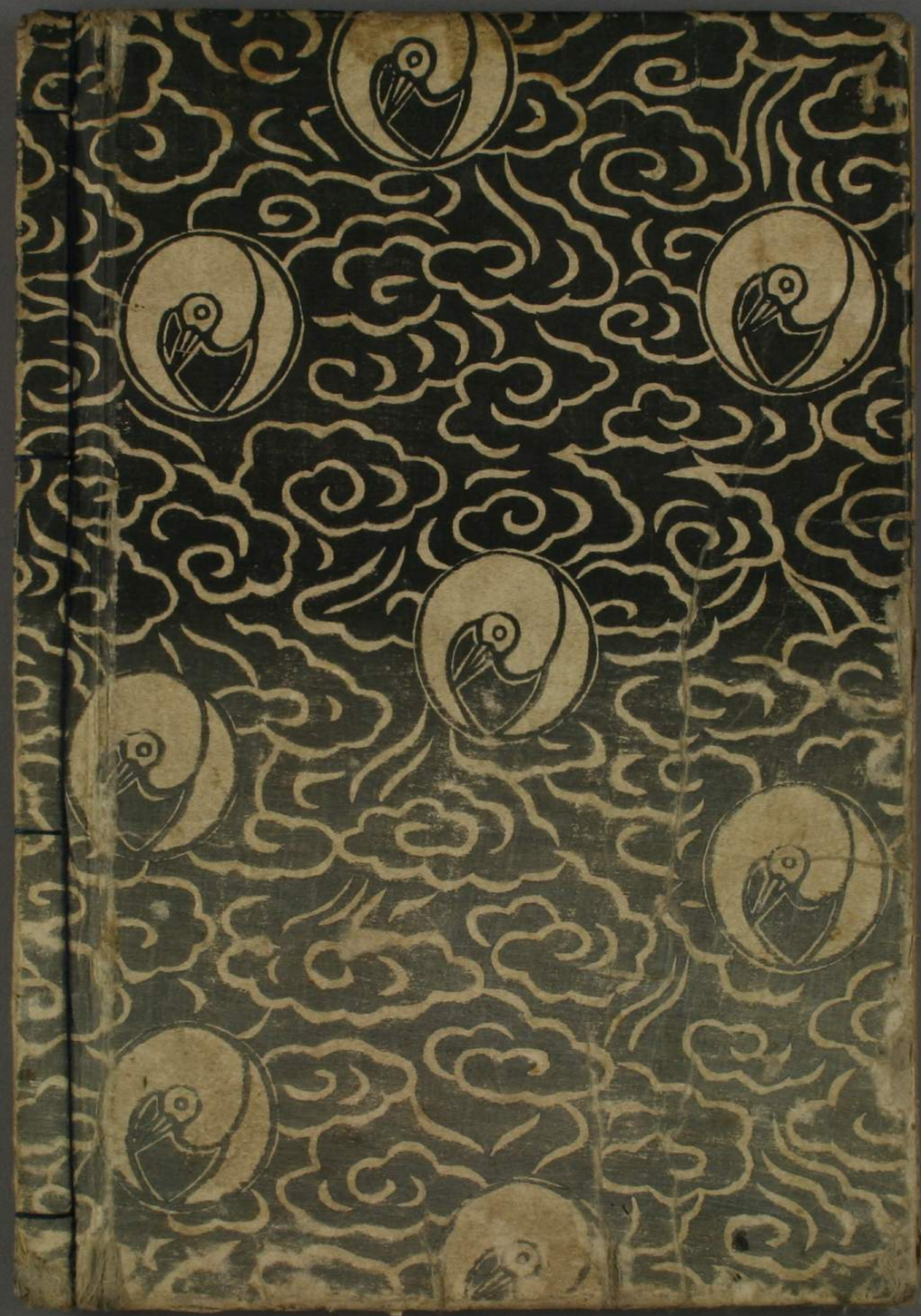
花明霖月夜殼急正秋元
かさこ媛

なるべくこそ彼修道院が功勲なるよし。翌の夜にありとも。なほ之を遂んハ掌の中にありと歓びて母斧木にも如此とのよしを粗ものがたりしかバ。斧木ハおどろき呆然親の身として子に不義を教ふるハ畧異なるもの哉とて首尾よく仕課せるべくおん身が日来心をかけて慕ひ給ひし夫のことが。石戸の荘の主となりて名ハ犍児にあらるゝが。海とも川ともまだ着ぬ水の泡なる殤子のこと後ハおん身をして若犍児に縡なしべく。この荘園ハおん身が東西久しく沈む家の名を興すもので此一挙にあり。馬飼などの帰らぬ前に討ちおほせ。まづ妨なからん人なき潟を諭するぞ。董次ハ点頭きつゝ歓び。翌の夜とこそ待にほどなく。笆媛ハその明の日例のごとく起出て傍に臥る娌女に。昨夜ハ若子が思ひもよらぬ虫気出てしていと苦しさうちまで噪がしかる気の毒さ。あまりより後ハ常にかはることなくよく寝て今朝もすんよこのめく。更に疾ひの容子もあられねバ漸く安堵の思ひをなしぬと詞の礼に娌女も。倶に安堵の思ひして。庵逼の方へ退てゆく。かくて朝餉も果しつ。縡に紛れて日中も過ぎ。媛ハ熟おもひ見る縁で董次が折にふれ心ありげなる挙動ハ。此方もそれと推すれど。今にもあれ舘の修理整ひなバの仮寓居とてしも鬱悒とありてもよらん程に。今ぞ秋で心に浪のたゝぬもの。その事とも善悪と縡耕をようて風にうち靡く風情のこゝろにて避すれど不憶と出来ての鈹へ従るや従らぬや。任ミ移りて住しても。董次父子が手に放れずん。かくてその上その責もいよゝ烈しくなりぬべし。既に昨夜からちつけに挑まるゝ身の悔しさ然ら襟さらの犍児ごふなれなるべし。で一言に辱しめて再びおとづれぬやうに。その手術さへも知りながら。腹立して後との障りもならん。犍児の為ならんと思ふなぞ。詞に和め穏とし。一寸遁れの口庭を経て。力に任し戯淫しさその挙動。心憎くも腹立しく。衛除んとせしそのまゝ瘠て心も彷徉と五日にもなりて。その

人の。自由ふるゝんとも。ゆゝ。暴ふ注ふ翠麻呂。妻ふ心祚收まらゝ。吾ふ
皈まる心地ふ。夫ようとの児の分抱ふ。婢女さえ傍来ぬまゝ。責い見れざる
あゝ。今宵も必挑まるゝん。一夜二夜いゝふも賺し。遁えるまゝどこの浜も。冠
者が在さぞうち欺く。當下斧木ゝ世の容い常ふ。ひのと孫し臭言巧ふ
いひゝふも。今ゝ久ゝ子の為ふ。まゞ吾心と勅ゝさん。底云ありてのゝえけゝ。
いゝふも良人ふ捨らまそよゝ。ゝもあゝぬ浮雲の風の隨ゝゝ吹まゝ。ふの方の
山ふ住とても。息ふゝうちのゝゝ。此ゝ天下ふ名と高ゝゝ。義経の孫
の嬢ゝ。稚けまとも翠麻呂い。範頼朝臣の孫ふ。清和源氏の庶流ゝ。
ゝとりちゝゝ邊鄙の郷士の渾家ゝゝ呼ま。生涯楽に暮ゝ。後代
での恥辱ゝ。然いと今い鶏鳥の羽刷鍛まて羽ゝ。ゝゝ囚果の毋
と児が分ふ通りゝ大義ゝ。冠者ゝ性方と隙ゝまゝ。心程ふゝゝねゝ。濁

まゝ世ふ住とて。荘園も捨妻子も捨。世とえふ捨ふ。倘然らんふ
夫婦の中。何ゝ隔てゝゝ間様ゝと宣ひて。妻子ゝ後の妨ゝ。ゝ條ふ
商議ゝ。人ゝゝまゝ。兄と妹ゝ。釈あまゝ。ゝ憂ふ。
世ゝ形も計らひゝ。常ふ然ゝ。鬼ゝ心ふゝ。ゝゝ。天魔れふ
為ゝ禍ふ神ふ崇ふ。ゝふゝ。此ゝ生涯ふ苦楽と俱と契りゝ。
良人ふ捨らまと阿容ゝ。存命てゝ。ゝゝ。この孩児も捨ゝ。因
縁ゝ。ゝふ。ゝ才の不幸。俱ふ冥土へ伴ふ。情ふ
不便とゝ。ゝ様ふ。ゝれとも。彼賊寨ふ殺ゝゝ。ゝ
人ふ。晴ゝ暗ふ突戻し。始ゝ。ゝ句心ふ易ゝ。
愁ふ場ふ。ゝ遁ゝ。ゝふ産ま出。今日と一期ゝ。
宮ゝ。ゝ因縁ゝ。生中亦ふ遺ゝ。乳房離ゝ。孩児と。

せん。示さんと心と定めぬ。その日の暮るゝと候けるぶ。まことに人々日暮るゝの極老
董次ぐ来るべし。然るときはまた妨あり。人の人めまふ翠麻呂ぶぐ目刺
殺。この死も俱ふ死ぬんと女ぶぐ弓馬の家ふ産ま者の所業くと手
匣の裡より懐剣と。把出ぶぐ次の間ふ人の来まる乳勢せ。ぐち孫ぶぐ
剣とび。後ふ隠しぶぐ〜ぬ新打ぐ〜来る婢女ぶぐ夕餉の膳と進むぐ。
媛ハ容子と悟らまじと例のごく給ぶ。四ぶとんまぶ晩く。落照ぶの
雨ぐさふ奴僕ぶ処ぶと立まぐ。透もあぐ〜れば且くハ汐湛ぶのぐ〜乳急
れぶつふせまぐとうる秘ふぶぐや黄昏ぶ彼誰ぶ董次ぐ来らば甲斐も。
とのタまぐまふ迷ひ出渕川へ身と沉めぬ。と心定めて稚児と。掻抱ぶぐ切戸
に閂ぶぐ遠処とぐち出ぐぐ

村田

朝夷巡島記全傳第八編巻之四終